

INFORMATION

【報道参考資料】

2022年11月10日
「熱中症ゼロへ」プロジェクト

「熱中症ゼロへ」プロジェクト 2022年の熱中症にまつわる3大ニュースを発表 ～統計開始以来2位の暑さとなった2022年の夏を振り返る～

一般財団法人 日本気象協会（本社：東京都豊島区、理事長：長田 太、以下「日本気象協会」）が推進する「熱中症ゼロへ」プロジェクトは、2022年の「熱中症にまつわる3大ニュース」を発表します。



【2022年の熱中症にまつわる振り返り】

今年の夏の平均気温は平年（※1）より0.91℃高く、1898年の統計開始以降、2番目に高い値になりました。特に、6月下旬から7月上旬にかけては、太平洋高気圧の北への張り出しが強まり、東日本と西日本を中心に記録的な暑さになりました。群馬県伊勢崎市では、6月25日に最高気温40.2℃を観測し、6月としては全国で観測史上初の40℃超えとなりました。また、7月1日には、観測史上初めて、同日に全国の6地点で最高気温40℃以上を観測しました。東京都心では、6月25日から7月3日にかけて、過去最長となる9日連続の猛暑日（最高気温35℃以上）となり、年間の猛暑日日数も16日と過去最多を記録しました。熱中症予防を呼びかける「熱中症警戒アラート」の発表回数も6月末から多発し、合計で889回（5月1日～9月30日）発表されました。これは昨年の約1.5倍の回数です。

5月から9月の全国の熱中症による救急搬送者数は71,029人（昨年より23,152人増）で、6月は昨年の約3.2倍となる15,969人（昨年より11,024人増）と、調査開始以来、過去最多になりました。猛烈な暑さとなった6月下旬から7月上旬には救急搬送者数が急増し、6月27日から7月3日の週の救急搬送者は14,629人と、前週の約3.2倍でした。急な暑さや梅雨の晴れ間は熱中症の危険度が高まります。来年の夏も、本格的に暑くなる前から「暑熱順化（※2）」などで体を暑さに慣らす習慣を心がけ、早めに熱中症への対策を行うことが大切です。

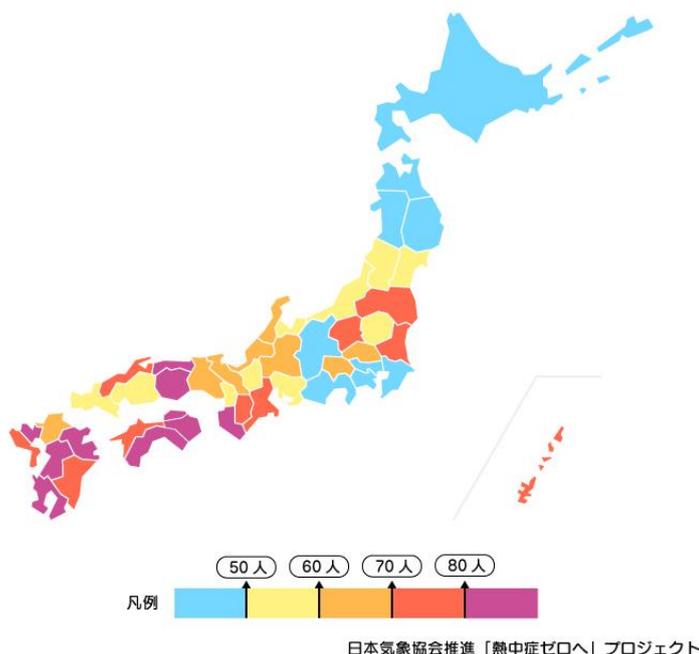
※1：平年とは1991～2020年の30年平均値

※2：暑熱順化とは、体が暑さに慣れることです。暑い日が続くと、体は次第に暑さに慣れて（暑熱順化）、暑さに強くなります。

熱中症による救急搬送者数（人口 10 万人当たり）

期間：2022 年 5 月～9 月

※参考：消防庁ホームページ



【2022 年 5 月～9 月の気象傾向】

（日本気象協会所属 気象予報士／防災士：久保智子）

5月の気温は、北日本で平年より高く、東日本と西日本は平年並みでした。6月前半は、オホーツク海高気圧の影響などで冷たい空気が流れ込み、気温は全国的に平年を下回りましたが、後半は太平洋高気圧の北への張り出しが強まり、暖かい空気が流れ込みやすかったため、気温は東日本と西日本で平年よりかなり高くなりました。6月下旬は東日本と西日本で、7月上旬は北日本で記録的な暑さに見舞われました。7月中旬から下旬にかけては、気温は全国的に平年より高かったものの、上空の寒気や前線などの影響で曇りや雨の日が多かったため、九州から関東甲信地方の梅雨明け（※3）は7月下旬となりました。8月は前線や湿った空気の影響で、降水量は北日本と東日本で平年より多く、8月上旬は北海道や東北、北陸で大雨になりました。9月は各地で厳しい残暑となり、上旬は北陸で猛暑日の所もありました。

※3：梅雨入り・梅雨明けの時期は、春から夏にかけての天候経過を総合的に検討して確定します。2022年の梅雨明けは、速報値では、九州から東北南部は6月下旬、東北北部は7月下旬でしたが、確定値では、九州から関東甲信地方は7月下旬、北陸や東北南部と北部では「梅雨明けを特定できない」となりました。



■「熱中症ゼロへ」プロジェクトとは

熱中症にかかる方を減らし、亡くなってしまおう方をゼロにすることを目指して、一般財団法人 日本気象協会が推進するプロジェクトです。2013年夏のプロジェクト発足以来、熱中症の発生に大きな影響を与える気象情報の発信を核に、熱中症に関する正しい知識と対策をより多くの方に知ってもらう活動を展開してきました。活動10年目となった2022年は、「気候変動の適応策としての熱中症対策」をテーマに活動を実践しました。

■一般財団法人 日本気象協会について

1950年に誕生した日本気象協会は、天気予報に代表される気象予測事業に加え、再生可能エネルギー、環境アセスメント、大気解析事業、防災・減災・安全管理に関する事業など、気象に関するコンサルティング事業を通じ、公共に資する企業活動を展開しています。

・「熱中症ゼロへ」のロゴマークは日本気象協会の登録商標です。